K

現代の文学＝39

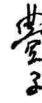
山崎豊子集

女系家族

―全―

河出書房新社

現代の文学39　山崎豊子集



© 1965

責任編集

川端康成　丹羽文雄
円地文子　井上　靖
松本清張　三島由紀夫

昭和40年8月1日　初版印刷
昭和40年8月8日　初版発行

定価　390円

著　　者　山崎豊子
発行者　河出孝雄
印刷者　高橋武夫
装　　幀　原弘(N.D.C)

印　　刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函　　貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロース・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社

電話東京(292)大代表3711
振替口座　東京　10802

製本・岸田製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

女系家族……三
年譜……四五九
解説……進藤純孝……四六三

挿画　風間完
写真　岩宮武二

山崎豊子集

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

女系家族

第一章

羽紬に利休橋の定紋をうった揃いの衣裳が矢島家の葬儀衣裳であった。店員から番頭、別家の一門まで同じ衣裳を着揃えると、葬儀のしめやかさより、重々しい格式が目にたった。

黒白の鯨幕を引き廻した光法寺の大門前に揃いの葬儀衣裳を着た家人が詰め、定紋入りの垂幕を掲げると、それだけで葬儀のりっぱさが人目に知れ、寺町の電車通りから光法寺に至る石畳みの坂道に、寺内からはみ出した樒が列び、繊維筋の老舗が、ずらりと名前を連ねている。

大門から本堂までの参道も、両側にずらりと三百対の大樒が列び、真ん中の通路の上には、板敷の焼香路を別にしつらえ、その上に真っ白な布を長く引き敷き、本堂正面に設けられた焼香場はむろんのこと、焼香を終えて脇門へ出る階段と、ゆるやかな坂道にまで白布が敷き詰められている。

本堂も屋根だけを残して、純白の布で掩われ、清浄な荘厳さに包まれている。堂内正面の一段と高い須弥壇の前に、家紋入りの棺捲に掩われた故矢島嘉蔵の柩が安置され、緋衣に七条の袈裟をかけた光法寺管主が大導師になり、色衣に五条の袈裟をかけた末寺十五ケ寺の住職が大導師の左右に居並び、番僧、納所がそのうしろに控えて、告別式の読経が続けられている。大導師に和する読経の声が松籟の音のように堂外にまで響きわたり、静かにたちのぼる香煙と、あかあかと大きくゆらめく燈明の明りが、堂内を美しく彩った。

白無垢縮緬の喪服を着た矢島藤代は、須弥壇の左側の遺族席に、二人の妹と並んで坐り、重たげに顔を俯けながら、眼の端でさっきから行われている矢島家の盛大な葬儀の様子を確めていた。

六年前に死んだ母の葬儀に比べると、やや見劣りするようであったが、矢島家の養子婿である父の立場を考えれば、やはり盛大過ぎるほど盛大な葬儀であった。

寺内一杯に三百対の樒と供花を並べ、通路に真っ白な布を惜しげもなく敷き詰め、導師には光法寺管主以下、末寺十五ケ寺の住職というのが、臨終の時に云い遺した父の遺言であった。それ以上の詳しいことは、口に出し

ては云わなかったが、暗に、六年前の昭和二十八年の暮に死んだ母の葬儀より盛大であるように、というのであった。

四代続いた船場の木綿問屋、矢島家の主にしては、とりわけて云い遺す必要のない言葉であったが、それだけに三十四年間、養子旦那の立場を忍んで来た父の最期の思いが、せめて母よりも盛大な葬儀ということにあったのかと思うと、藤代は、父の執念の浅さが憐れまれた。

矢島家は、宝暦年間に北河内から大阪へ出て、初代の時、南本町に間口半間の小さな木綿糸屋を開き、その後四代を重ねて木綿問屋の老舗として繁昌するに至っていたが、初代からあと三代は、ずっと跡継ぎ娘に養子婿を取る女系の家筋であった。したがって、藤代の母も、祖母も曽祖母も、揃って矢島家の家附き娘で、老舗のしきたり通り、番頭の中から婿を選んで、家名と家業を継いで来たのだった。藤代の父の矢島嘉蔵も、矢島家の番頭から二十四歳の春、跡継ぎ娘である二つ齢下の松子の養子婿になったのであった。

藤代のものごころついた時から、矢島家の奥内は絶えず女客で賑わい、雛祭りや菊見、雪見などの四季の遊びが華やかに行われていたが、父の嘉蔵は、機嫌を悪くするどころか、女たちの機嫌を損わぬように店の間の結界（木格子の帳場）の前に坐って、せっせと商いに身を入れていた。

お正月が来ても、矢島家では、男正月より、十五日の女正月の方を重んじた。この日は、朝から家紋入りの高脚台の御膳を並べ、明石鯛と七草粥を祝儀にしたが、この御膳の並べ方も、父の嘉蔵を正面に据えず、まだ五、六歳の藤代に紋付を着せて正面に据え、

「なにぶん、家の大事な跡継ぎ娘のことでっさかいな……」

母の松子が妙なことわりを云い、その頃、まだ生きていた祖母のかねも、

「藤代ちゃん、あんたのおかげで、結構な女正月だす、矢島家の女ばっかり、三人揃うて――こんなお目出度いことはおまへんわ、曽祖母ちゃんが、もうちょっと長生きしてくれはったら、四人揃うたところだすなぁ、女ばっかり――」

そう云い、祖母のかねは、父の嘉蔵の方を向き、

「どうぞ、あんたも、お食べ――」

まるで召使いに云うような権高なものの云い方をしたが、父は表情を変えず、紋付の膝を正して黙って箸を取った。

藤代に次いで、千寿と雛子の二人の妹が生まれた時も、世間なら、よりにもよって女の子ばかり三人もといわれるのを、矢島家では、

「うちは、女筋の方が栄える家やさかい、跡継ぎ娘が三人も出来たら、大繁昌というとこだすわ」

と、逆に親戚や別家まで招いて、内祝いの席を張り、お七夜の祝いも、派手に振舞った。

そうした矢島家の家族関係に何の疑いも持たなかった藤代も、女学校へ行くようになってからは、学校で教わる修身や、友達の家へ招かれて、はじめて自分の家が、普通の家と違った習慣と雰囲気をもった家庭であることに気附いたのだった。

藤代の家では、影のような存在に過ぎない父親が、どの家でも女を叱りつけ、女のすることに一つ一つ文句をつけていた。最初のうちは、それが眼に灼きつくほど新鮮な魅力で、父親が大声でどなりちらしている家ばかりを選って遊びに出かけていたが、度重なると、それがいいようのない不快さになって、ぷっつり遊びに行くのを止めた。

藤代にとっては、やはり幼い時から馴染んで来た、すべての面で女の我儘を押し通せる矢島家の習慣と雰囲気に生ぬくい快さを感じ取り、何時の間にか、藤代も母の松子に似た振舞いをするようになっていた。

母が父を疎かにし、権高なものの云い方をすれば、藤代も表面では父をたてながら、心の中では矢島家の総領娘として、養子婿である父を軽く見る癖がついていたのだった。

父の死んだ日も、そうであった。

肝臓で長く臥っている父が二、三日前から急に激しい弱り方をみせていたのに、せっかく取りにくい切符を取ったのだからと、父の看病を女中と附添婦に任せて、姉妹三人で京都の南座へ芝居見物に出かけ、二幕目の終りに、家から知らせて来た電話で、父の急変を知って、慌てて車で馳せ帰ったのだった。

千寿の夫の良吉が、店先にたって待ち構えていたが、藤代は良吉には目もくれず、まっすぐ通庭を通って、内玄関から奥まった父の部室へ小走りした。中庭を挾んだ廻り廊下の角を渡りかけた時、中庭の植込みを縫い、内玄関へぬける人の気配がした。廊下を歩かず、庭伝いに用を足すのは、店の者か、女中か、父の看病を勤める附添婦にきまっていたが、洋髪に結った首筋のきれいさは、日頃、見馴れぬ女のうしろ姿であった。一瞬、はっと足を止めかけたが、背後から来る千寿と雛子の足音に追われ、そのまま、まっすぐ父の部室へ急いだ。

病室の前まで来ると、藤代は急に足音を忍ばせた。病室に続く襖は、さっきの女が閉め忘れたのか、開いたままになっていた。藤代はそこで声をかけず、そっと敷居を跨いだ。消毒薬の臭いがし、父の嗄れた低い声が聞えた。

「宇市つぁん、ほんなら、そのようにあれのこと頼むでえ、それから……」

不意に父の声が跡絶え、苦しげな息遣いがした。思わず、襖の陰に体を隠して、次の言葉を聞きかけると、

「お待ちですよって、早う内へ入っておくれやす」

外の気配を読みとるように大番頭の宇市の声がした。はっと狼狽しかけたが、藤代は病室に入るなり、一番近い枕元に坐り、

「お父さん、どないしはったのだす、いま帰って参じました」

と声をかけ、千寿と雛子も父の顔を覗き込み、

「お父さん、しっかりしておくれやす」

大きな声をかけたが、父は弱々しい苦しげな表情をし、三人の中の誰を見るともない焦点の定まらぬ視線で、

「葬式は派手に……お寺一杯に三百対の樒と花……それに白い新の布敷くのを忘れんといてや、白い布を……おん全部に読んでもろうて、百人供養にしてや……」

区切るように云い、息切れが激しくなった。藤代の向い側に坐っている医者と看護婦が、藤代たちを眼で制し、リンゲル注射と酸素吸入にかかった。何度目かの注射らしく、医者は痩せ細った病人の腕をさするようにし、看護婦と附添婦が、酸素吸入器を枕元に引き寄せた。

千寿と雛子は表情を硬くし、二人のうしろに坐っている千寿の夫の良吉も、顳顬のあたりを震わせ、重苦しい沈黙が部室を埋めていたが、藤代は葬式の仕儀などより、今、聞いておかねばならぬことを考えていた。酸素吸入の吸口が、かすかに揺れ、酸素の泡がつぶつぶと吹き上げていたが、

「お父さん、ほかに何か云い遺しはることは、おまへんのですか」

聞えているのか、聞えないのか、吸口を弱々しく口に当てたまま、身動きもしない。医者が激しく手で制したが、

「お父さん、私らは、どないしたらよろしいのだす？」

藤代は、父の体の上に掩いかぶさるように云った。不意に吸口が父の口もとからはずれ、大きく眼を見開いたかと思うと、

「あんたらのこと……宇市つぁんに云うてある」

「云うてある？　肝腎の家のことはどうなるのだす」

「家のこと……」

呟くような細い声がした。思わず、父の口もとに耳を寄せると、

「宇市つぁんに、ちゃんと云うてある……宇市が……」

试读结束：需要全本请在线购买：www.erto

そう云い、宇市の方を空ろな眼で指すようにしたが、藤代は宇市の方を振り向かず、

「云うてあるて、どんな——私らに云うておくれやす」

重ねて藤代が問いかけると、父はそれ以上の答えを拒むように眼を閉じ、二、三度、せき込むような咳をしたかと思うと、そのまま眼を閉じてしまった。

千寿と雛子は、両手で顔を掩い、肩を震わせるようにして泣いたが、藤代は、臨終に間に合った三人の姉妹を前にしながら、直接、家の始末や遺産のことを自分たちに云い遺さず、わざわざ大番頭の宇市に云い遺した父の真意を測り兼ねた。

母に倣って、父を軽んじた娘たちに対する父の冷たい臨終の拒絶か、それともっと、含みのある仕打ちなのか、通夜の日から、藤代の胸の中で、父に対する複雑な疑いが次第に膨れ上っていた。

[illegible]、みになり、番僧が遺族席に向って

「ご遺族のご焼香でございます、喪主の方からどうぞ——」

藤代は静かに席をたった。居並ぶ導師たちに一礼をし、祭壇の前に歩みよると、格式の高い家の女喪主にのみ許される白無垢縮緬の裾を床に引きずるような姿勢で、重々しく霊前にぬかずいた。

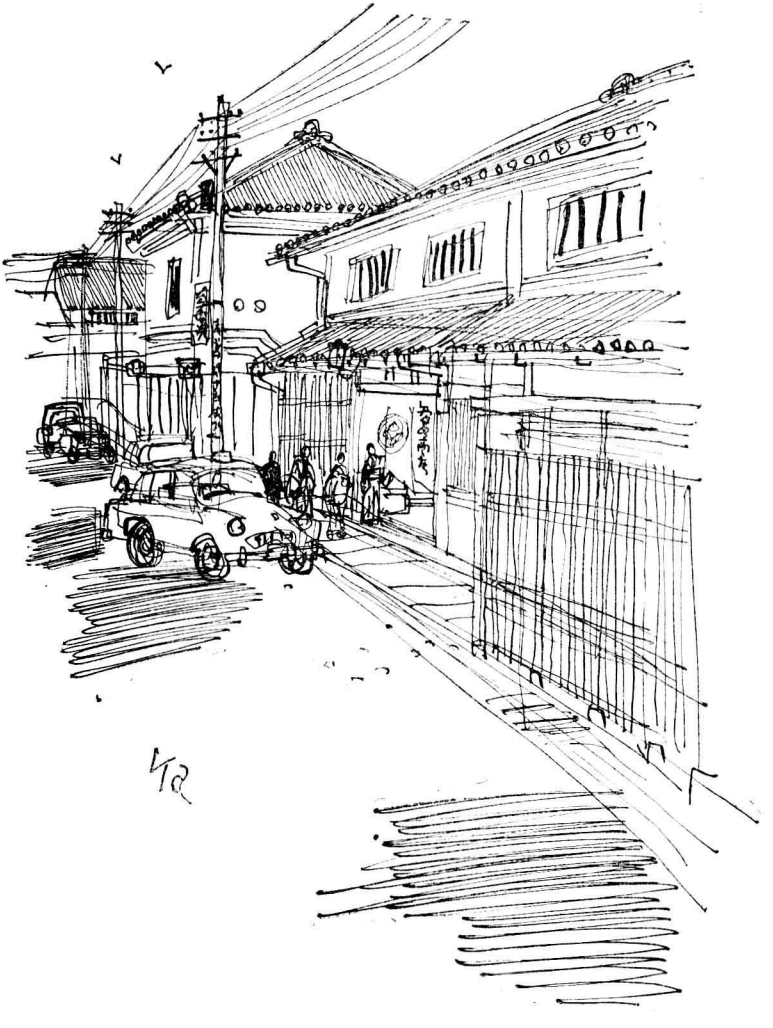
矢島家の総領娘で、今日の葬儀の筆頭喪主であることを印象附けるために、わざと定められた立礼の焼香をせず、焼香台の前に膝を折り、白珊瑚の珠数で長い合掌をした後、念じるような恭しい焼香を行った。その間、居並ぶ僧侶、親類、別家一族の堂内参列者が、一斉にまぶしげな視線を藤代に向けていることを、十分、意識して振舞った。藤代が席に帰ると、千寿が焼香に起った。

姉の藤代に比べると、小柄で顔だちも姉の派手やかさに劣っていたが、白無垢縮緬の喪服に合っていた。千寿はその顔だちのように控え目な動作で祭壇の前に起ち、うなだれるように頭を垂れて香を焚くと、顔を深く俯けたまま、自分の席へ引き退り、妹の雛子と入れ代った。

雛子も、二人の姉と同じ白い喪服を着て、霊前に歩んで行ったが、まるい下膨れの顔が白い喪服のもつ古めかしい格式と飛び離れ、焼香台の前にたつと、場馴れしないぎこちなさが目にたった。

矢島家の三人の女喪主の焼香が終ると、千寿の夫で、矢島姓を名乗っている矢島良吉が、黒羽二重の紋付袴で焼香にたった。居列ぶ僧侶や参列者に気圧されているらしく、眼を上げず、青白むような表情で焼香台の前に起ち、妙に慇懃な辞儀をして香を焚いた。

藤代は、その生真面目でなんとなく陰気な良吉の姿に



侮蔑するような視線を向けていたが、良吉が生真面目なばかりで策のない千寿の養子婿であればこそ、一旦、自分の我儘で他家へ嫁し、出戻りして来た自分が、大きな顔をして、今日の葬儀の筆頭喪主を勤められるのであった。

良吉に代って、死んだ母の松子の妹で、分家をたてている叔母の芳子が焼香にたった。色の白いたっぷりした横顔を見せ、何時も洋髪にしている髪を、今日に限って古めかしい黒元結いの忌髷（葬儀及び忌中に結う髪型）に結い上げ、矢島家の女系の一人であることを印象附けていた。藤代は、この何かにつけて、今もって分家をたてさせられたことを不満にいう叔母のことを考えると、二人の妹たちだけでなく、この叔母も油断のならない女の一人に思えた。叔母に続いて、矢島家の親類縁者、別家代表の焼香が続き出すと、藤代は、導師に一礼して、席をたった。千寿と雛子も、藤代のあとに従った。引き続いて始まる一般焼香の参列者に、矢島家の喪主三人が揃って、会葬御礼の挨拶をするためであった。

本堂横の鐘が鳴り、午後二時の一般焼香の時間を告げると、堂内の読経の声が高くなり、木魚を敲く音もさらに高くなった。樒を並べた大門前に、俄かに人が往き交い、大門から正面の本堂に至る通路の上に、黒い喪服を着た弔問客が静かに切れ目なく続き、通路の両側に鼠色の葬儀衣裳を着た矢島家の一族が、樒のようにずらりと居列んで弔問客を迎えた。白布を敷き詰めた通路に黒い人影と、鼠色の衣裳が渋い配色になって動き、早春の薄ら陽の下で、一幅の絵のような美しさであった。

弔問客は、正面の通路から本堂前にしつらえられた焼香場の階段を上り、焼香をすませると、向って左側の階段を下り、そこから緩やかな勾配になっている坂道を降りた。この通路の両側にも、矢島家の葬儀関係者が列んで、弔問客に敬意を表し、脇門へ出る順路を示した。

矢島家の三姉妹は、脇門の前にしつらえられた礼場にたって、焼香を終えて脇門へ出る弔問客を迎えていた。青竹と白木で囲まれた礼場に、藤代を真ん中にして、左右に千寿と雛子が並び、珠数を持った手を膝の上に重ね、一人一人の会葬者に立礼をした。

黒い喪服を着た会葬者たちは、姉妹三人並んだ白無垢の喪服姿に異様な美しさを覚えるのか、一瞬、はっとしたような表情で足を止め、目を凝らすように三人の姿を見詰めてから、鄭重な礼をして門を出た。

藤代は二人の妹と並んで、会葬の御礼を繰り返しながら、さっきからある一人の弔問客を待ち構えていた。

妹たちに気取られぬように伏目がちに俯いて礼をしながら、切長の眼の端で、鋭い目配りをしていた。モーニングや紋付の喪服姿に混って、一目で華街の女と解る抜

き衣紋風の喪服姿が見えると、ちらっと探り当てるような視線をあてた。

「どなたを、お探しでっか？」

藤代の耳もとで、千寿の声がした。目を向けると、左側にたっている千寿が、白い細面をかしげるようにして、藤代を見詰めていた。

「ううん、別にちょっと……」

曖昧に言葉を濁しかけると、

「姉さんも、あの人を、探してはりますのん……」

会葬者の切れ目を見計いながら、控え目な表情の中で、眼だけが人の心を覗き込んでいた。

「別に探すというわけやあらへんけど……」

相手が日頃、何かにつけて気走りが足らず、おとなしいばかりが能であるような千寿の問いかけであっただけに、藤代は返事に迷った。

「隠さんかて、ええやないの」

不意に雛子が口を挟んだ。藤代の右側にたち、会葬者に向って神妙に頭を下げながら、

「あの人のことやったら、きょろきょろして探すより、宇市つぁんに聞いた方が早いやないの」

下膨れの小さな顎を突き出すようにし、藤代から五、六歩斜めうしろの脇門の際にたって、会葬者を送り出している大番頭の宇市を指した。

宇市は、ほかの店員や番頭と同じように、単紬に矢島家の家紋をうった葬儀衣裳を着ていたが、腰につけた袴だけは、大番頭らしく地の厚い仙台平をつけていた。何時ものように白髪まじりの太い眉の下に、見開いているのか、いないのか解らぬような曖昧な眼の開き方をし、藤代たちから、五、六歩斜めうしろに退った位置にたって、三人の介添役を勤めていた。

長い列になって続く弔問客の中には、日頃、顔見知りのない三人の姉妹へは無言の礼をし、宇市の前まで行くと、たち止ってねぎらいの言葉をかけて行く老舗の店主たちが多かった。

その度に、宇市は白髪頭を低く下げ、先々代から仕えている大番頭らしく、矢島家に対する店主たちの長年の愛顧と、今日の弔問の礼を鄭重に述べていた。見ようによっては、矢島家は誰が死に、誰が代替りしようと、大番頭の宇市さえいれば、何の変りもないという世間の眼が、そこにあるようだった。

藤代は、そうした世間の眼に勝気な反撥を感じたが、事実、矢島家は、先々代から勤めている大番頭の宇市が、矢島家の財産管理を受け持っているのだった。三代も女の跡継ぎばかりが続き、若い番頭の中から選んだ養子婿が商いを継ぐことになれば、いきおい長年商いを勤めている大番頭が、新しく矢島家の店主になった養子婿より

商いに通じ、特に表向きには隠されている代々の財産勘定にも通じているのが、当然であった。

宇市も、三代目の先々代からの大番頭であったから、藤代たちの父であった矢島嘉蔵より内方に通じ、こと財産管理に関しては店主である嘉蔵が、宇市にものを尋ねたり、相談をかけていた。そんな矢島家における宇市の立場が、宇市の呼び名にも現われ、養子婿であった嘉蔵はもとより、家附き娘であった祖母のかねと母の松子までも、宇市を呼び捨てにせず、〝宇市つぁん〟という、いささかの遠慮を籠めた呼び方をしていた。

藤代は、弔問の列が跡切れ、宇市がほっと肩の張りを緩ませるのを見計らい、

「宇市つぁん――」

あたりを憚るように呼んだ。五、六歩の近さであるのに聞えないのか、宇市は陽溜りになった脇門の際に背をまるめるようにして起ったまま、身動きもしない。

「宇市つぁん――」

やや高目の声で呼ぶと、宇市は初めて気附いたようにまるめていた背を伸ばし、藤代の方へ振り向き、頷くように頭を下げると、人目にたたぬようにつうっと、藤代の方へ寄って来た。

「お呼びでおましたか、なんぞ、ご用で――」

慇懃に応えながら、眉の下の眼だけは、用心深く藤代の表情を探っていた。

「あの人は、お焼香に来てはりますか」

「えっ？　どなたはんのことで、おまっしゃろか」

呑み込めぬ表情をした。

「私らより先に、臨終の席へ行きはった人があるはずだす、その人のこと――」

いきなり、ぶっつけるようにいうと、

「ええ？　何でおますて？　ご臨終の時に、どなたはんが――」

宇市は、右手を耳にあて、体をかしげるようにした。

「それを、あんたに聞いてるのだす、あの時、宇市つぁんは家に居て、何でも知ってはるやおまへんか」

「ええ？　手前が知っていること――お家に居て、何でも、ええ？　何でおますて――」

宇市は、耳に手をあてがったまま、さらに体を傾け、声高に聞き返した。藤代は慌てて眼で制し、

「そないせんと聞えまへんか」

怒りを抑えた声で云うと、

「へえ、このところまた一段と耳が遠うなりましたようで、耳のそばで云うておくれやしたら――」

と云い、藤代の方へ耳を擦り寄せるようにしたが、弔問客が続いて来ている時に、宇市の耳の傍へ顔を近附けて話など出来るはずがなかった。

「そないせんと聞えへんのやったら、もうよろしおます」

不機嫌に顔を背けると、宇市は、一瞬、ちらりと藤代の方を見たが、

「ご無礼でおました」

と云い、慇懃に頭を下げ、傍にたっている千寿と雛子の方にも断りの礼をして、三人の傍を離れた。

告別式が終るまで、後四十分ほどの時間であったが、弔問の列は切れることなく続き、藤代は、喪服を着た女の弔問客の中に、父の死んだ日、中庭の植込みの陰に見た女の姿を探していた。三十二、三歳の首筋のきれいな女――、それだけが藤代の目じるしであったが、黒い喪服を着た女の姿は、いずれもいい合わせたように首筋がくっきりぬけるように美しい。もしやと思いかけると、誰もがそう見え出し、そんな頼りなさでは到底、探し出せそうもない。

宇市の方を見ると、脇門の際にたって、せっせと弔問客を見送り、重だった老舗の店主の姿を見かけると、擦り寄るように鄭重なお辞儀をし、門の外まで送り出した。その眼端のきく行き届き方を見ていると、さっきの見当はずれな応答は、やはり藤代の質問をはぐらかすための呆け方であったらしい。

宇市なら、それくらいのことはし兼ねない。養子婿である店主の嘉蔵からは、何かにつけて相談相手にされ、一方、家附娘であった藤代たちの母からは、宇市が夫のいいなりにならぬように牽制され、絶えず、双方の間にたって揉まれ、ことをうまく治める纏め役が宇市の勤めであった。長年のそんな立場が、慣い習性になったのか、宇市は何時も無表情に黙り込み、何を聞いても即答を避け、白髪まじりの太い眉の下から、用心深く相手を見、思案したあげくでないと返事をしない。それも都合の悪い立場になると、ほんとうに急に耳が遠くなるのか、それとも聞えない振をするのか、見当はずれの呆けた返事をする癖があった。さっきの空っ呆けた応答も、この勝手聾の類に違いなかった。

藤代は、むうっとした表情で宇市から眼を離し、ふと焼香場から脇門へ降りて来る通路へ眼を向けた途端、妙な人影に気附いた。

流れるように続いている列の中で、喪服を着た一人の女だけが、何度も通路の端にたち止まり、通路の上に敷き詰めている白布を草履で撫でるように踏みならし、両側に列んでいる榊の数を一本、一本、眼で数えるように読んでいた。前からでは首筋のきれいさは確められなかったが、通路に敷き詰めた白布を撫でるように踏みならし榊の数を数えるのは、明らかに榊三百対を並べてほしいと云い遺した父の言葉を知っている者の仕種であっ

试读结束：需要全本请在线购买： www.erto